續近世畸人傳

家傳

二

第六

内閣文庫
和書
類 三四九九四
號 〇五
冊 一五八
函 九
架

内閣文庫
和書
類 三四九九四
號 〇七
函 一〇
架 五
冊

内閣文庫
番號 和 34994
冊數 10 (7)
函號 158 148

国立公文書館
National Archives of Japan

續近世畸人傳巻之二

里村紹巴

里村紹巴は此の松井氏。紹叱と共に宿る中門廳院の唱食にて。ひとへに忘れて。たゞいやさきにいて。出れば天下になきんといふ。所に用捨に時宗乃僧なりて。るゐ南都よりきたりわり連歌をもてまるがうめにおれをぬしとせり。紹巴はもとより奈良の連歌師大東正云に学びて。かの所にとゞまり関白よりさいさい年出よのぶる。是ちくさくはゆめて。そのかねにいろり王侯士庶に師しちぐりたる名天下にあまねし。ゆゑ里村紹巴より。連歌に出て紹巴と稱しうけ。松井の氏よりそうふ也とて。

かの里村と聞しなん。又隣に新の号ハ三條西稱名院殿乃
給へる所即公の御染筆臨江斎の三字を与ふ天竜寺の策彦
実乃漢文書南都よ伝へおる人あり。仍ちなほ此稿よ載ける
も洩さぬなり。明智光秀本能寺に押よせ事果けし後。城内
信忠の出で次宝所ぬ出でゆくつかる。此時紹巴に接謀ありけれバ其
南渓陽光院の宮（後陽成院の御父御即位なくて薨し給ふ）の小比乃御所をむけよ
城内へ遷しつる。陽光院宮ハ禁中へ逃させ給ふよ。事急なれバ
御輿なく。今茂紹巴をさせ給へ。折しも紹巴も門をとる。
やぶく自輿をとぐりそとまうしらべ。此者貴二ては御供を
勝つらしふ恩ひ謝しまうらし後。やぶく法服を召まりて以て。
先さかんで節をいふ次の事。蓋御酬をはらんや。きらふぬりて
法橋よ叙せらる。豊太閤乃時よもちらし。法眼とかくしり。其名

末ほく高し。技能めにある者廿人紹巴を一人と定む。宅を大炊御門
堀川の東に構へ。今も紹巴町といへり。（大炊御門ハ下立売也。宗珠庵と名づけ…）
花顛（花顛ハ紹巴なり）後寿次乃師なるが為に疑を第り。三井寺に謫せられ（花顛云三井寺中荘厳寺へ）
をとるが。頓に赦にあふて紹巴の子玄仍玄仲
これより業を嗣り。昌琢先生の蓋宿家となる。昌琢乃祖
母ハ玄仲の女なれバ其詳説ときゝ人もあらまし。ちなみれバ
先此説を巣斎南都の…又…出しあり。次よ花顛が
…を掲ぐ。是ハ負むき乃戴恩記よしるす。紹巴
負むる私も洩さ師弟の問。秘く見聞する所の記なれど
皆貫事也。先づ人々ある連歌を学ぶ人間。いまだ百万遍
の寺光誉上人として東行し。従るに随義法師となる
やくあるよりぞ…袋を荷て…とへ…小門宗叙（紹の勝師…名あり）

いとをかしくこそめでたけれ。後宮業平も質しかりしとぞ。宗金とくさのうきをぶつぬれ衣の道に種名院殿小学ひ給へ。其は墨を行ふ事は流を汲むに似たり。はるかに思考す。結局いと考ず

さて又世間力法さくらを。枝の四つ道場を。寺八十法花堂二多の東寺に辻切のものなるべし。枝の四つ道場を。寺八十法花堂二多の東寺に辻切のものなるべし。

つくれとぶ田に学ぶ。市廛美ふ。おひしるのなり。

ゆるとうも嘱くこと。或は太閤の花見はかりに

ゆ。ふ山にうぐとくるに。句を聞く。懐紙

ふ。ふるせ作者に。紙色部を掛て。句ゐ出ずるに

て。筆とるに。ものを変じ。それもくるし

ゆ。ぶと作れば。いふも宜うぬるとけり。凡けこの

序句をかつてものの四つにてもつくるふ。

事ひとと。去者は下。いかぶ者をいひ。ものを

定たる。句宮も家よりもいつれの。いつれの

集ものの。ひ内のこのとはうねるふ学ち

かなつ。ものもそしもの。作句そしめ。

それ。そそれそれ作句ふ紙色もそなて学ば

法ひ内ものを。ばは藤孝の作すに系ち。きの

ゆふ。めばしきふ作ち。何の集を詩人の所為ち

わを学れそ。べ人学ひ。紙義る人。ふ

やすいるふ。いづれる。ふ前ら。ふ前と作る

なり。ひは作ものと作ものを。ものて学ものを

しめ作ち。作れ作ふ。紙ゆ巻百合さ

きて首ぐ所りといふ句を作りけり。紹巴二三遍流涙して。ぜひ其ぬ乃所句をくして。情命にてこれをけ
まげ。そ紹巴が形を寄せ作りし。寄かるうぐりしう。百合の
くさりてせて作る時。紹巴よろこき例もい。是法
れ尚ちくずづるよりさらぐと作われとやくわ。
不斜無ぐ所りし。紹巴いのこれまことと作るとぐ。ぬの
こ其りた樂所の付。貞はあるこりてぐれるの
作りこう

さぐれ作りせよて彩るはぐるまるれやがて言うん
といふ所まこそ。その翁ちと光ちと為りこ作りし。
後世。慶長之年こ。大はち中四之後は墓あり

本阿弥光悦

本阿弥光悦。法号庵又自徳齋。徳又齋とも号す。本
姓木の氏族多賀豊後守高定の孫。作品沿革又
宗春乃三男なり。母は妙秀。本阿弥
い刀鋼鑒定磨礪浄拭等と家業こ。これとも本阿弥
のこ事もいふ。ように光悦この事ふ也ぐ。
ちとる不乃浄拭よ長し。是ふつよて自ハ蔵
一ふりからいのぐ作ちもの。一ふりからいのぐ作ちもの。
人の力と相ちは白ちこ作るなぐ。む書ふ所ぐ作る
近衛こ院殿光悦よ。ぐねまぐ天下に能書こ又
ハ作ちとるぐ。光悦ぐて次ハ最。次ハ八幡の宮し
物部とくん。脇ぐ。その先ぐよ作まこ。恐なぐ私
ふりこ作ぐ。ぜひこの筆天下に名あり。我ハ業田之

尊純法親王と筆へをかれし四筆をもいふ。藤之助下
三人をも兼たる親王の法号をいふ法号を賢仙
さうべつ。やさしく歩は藤之ふかうに光悦とめしくれば。行き
ぶ。あつてまうと。ひいみよくへよめうと。悦ぶとき
うせをうひ。ゆいくと。言もあらうふ作ある。悦やひ
ようげうとあるわが。陶器よりうぶ。光悦はうれ
くやうわが。ゑをわうわせまひ。行とうひくいうと書
ぶれて。藤之ものうもまりう。杉筆書とうふ藤之へ
ゆうり。ゑをうゆうやぶ。御あ流よせしは。今古乃書
家とふ。浮しのひ。孫過庭。虞世南。ゆうふ王右軍
とをういぶ。ゆうもあるし。今人かうの風とをんでうれ
心とうれば。その流とをいるとをぬうふ。書ぬのれと

浮んうい。ものく我ぬにゆうせうと。一家と流しゆを
宮つ。二る僕ゆも学ふ。ひいるとうとうとやうに
書とのうと。ゆくふ。ゆうんうてゆうぬ。行のうぶぬ。
日二るゆうり。ゑの術書もうなうべう。ものく一風とをいをし
とうくべう。今も迫流光悦流流ゆうとせるゆう
ゆやうう。ゆうをぬうく。ゆメうとうを善し。浮ゆる高拙ゆよ
絵富ゆうれは。ゆうもう光悦ぶ半の半るゆうれば。ひそうふ
野陶玄渓奪峰の隠者にゆうぶゆたるとう。且ゆ出ゆう浮ゆうう手。ゆうと
うういいうれるゆうるうゆんゆう。ゆう陶器とぬうて焼ぬうとうも
ゆうはゆうう浮ゆうう。凡蘆雪のゆうあうぶ。経済のゆもううて
雪峰の書ゆ金沢へよ山と考へゆうとぬう。人民多
うの芸とうるゆ。ゆうわううぶ世ゆ。ゆくうう。

その一事に七月十四日にあつまる所の人々、
盆踊とて、さまざまにおどりしうたの
今様の出鱈目、常にたはぶれなるかぎりを
うたひ、ひとしく所作の物まねをなすに
ぶるものとみるうちに、毎つねに行平の物をかたるにさつぬ
もとより、あまたの人いとゞもに、はなはだしきこゝろにぞ、
用ひるものどもれ面をひきかくしてうたをもうたひ
ひとしきに、ぞくれわかちうたびまつりしと、寛永年間海
北奇譚と題する物語りしたりとて、くるとしてくるを設けられ
義経母の母なる所なり。けはなはだくるし。此日より山城
などいふもの絶えり。是より先きいくやうれ面をかぶらられ行て。
人を犯すもの多くなりしとぞ。寛永十四年二月ころふ

ぶる。年八十餘。光悦まいりのあるまり
聞に云。光悦生るゝ所。光悦は養子なり。
光甫は空中齋と号し、法眼に叙せ。光悦三事
にもすぐれ、光悦に劣る者なし。年も九十餘
十八人あり。年の八十餘のはまれなり。天和二年
壬戌七月十四日。八十七歳にて死せり
高野云。此僧人の子孫なるべしもあり。花顔なる
出家。手一事も加ふるに及ばず。文章のおほ
と結縁するのこと

岡野左内

筆野左内は、信濃よりうまれ出て、
越後守といふ。その武功ども過ぎて軍記よりもゆゑ

で仕度をして一騎おりて。ほの陣ね所に二町ばかり
鉄の砲はなしとかれ時の沒。夜ばかりて寄て初めしに。を男を
差し。彼陣ね所とおもうるばかりにいたりたるのごとく。
けんをびるよ福者ゝゝなり。ぶ所の馬屋の中間よ。黄金をね
もらうるものあるを。ゆゝしく羨ましく。寄おるる者候ゆゝして。黄金
十ねとらせ給へ。貧くてハ武功も金しがるとおもふるゝで。凡。
いとゝあるハハ金をもうまさ並べそのふ所なたのことに。
きゝ人ゝ武士れ道ゝ。ぬるゝゝ人ゝといふ為ハなりしが。
或ハ此ゝの子ゝとなりあるに。銀をれ士に海と仕間しなることと
ゝゝをれば。ゝゝる金ハゝのきれゝちゝ。貧ゝの太刀と等び
鹿もゝる馬よ。銀ゝらゝ。一日二度のちゝ海ゝ。ゝゝ
なるゝゝ。ゝにゝゝしが。を向ハ金のゝハあるひ出ゝ

今きこゆるとぼくこくいちふぜんどうおよりこなんど軍陣に勝んでいかに役者とかねよく紀家となるべし。つねにうつくしく教ゆ。人をのなをとべ。年はいくつもぬしに成ふるいくるるなり。軍法のことわれば。俗にあつうしくこそれやうけとるがごとふ。ものやうにわるべとうつりえべ。おのれはよに出陣のまことを得れば。こるあり。紀家者もようさいるるあれば。これとさせこくること。いつりまでて所の紀の業をおもるべ

る松源八

る松源八は遠い出でれ富士射藝の師。老くして出でん。為に人京正清朴氏教をし。若されはその過失ふ連世せられて猶と離し。國内大系部に離れ。家貧あれば府に衣食と給て。それ在宅の清に農業を務るとなる。源八い

業をひるるひるれば。れよ物で業をと賞んとこうよ。ぬいまこそひとうのにんりでいりくといでもいくばくれとうあんたで紀のこくこくこれ男子行くとて價とうけど。もとより源八業をと喰んこうこはいけてこれ價源をとるの業を結ばて去。國を求ふ流ののわるとんこくよやこ。けくの求るなんと。れ家こくこれも國く解してうけど。人富家の家門清他よ適こくあるはい源八聞く國こるくかれば。ること新せられたれふ其ひび。戸清ることとしるち。家の中央よ席し。俗よ弓矢とる。八方に眼を配りて紀家聽こべ。ようの村中業家の為出在せる。源八はけこ。つねぐ立こるれよ来他よ見れこいくこれびこけ法夜他よこるなれこれこべ。手い物ここ。せて。清出成せこんここ。俗よ超聽よるべ源八こ稽りて産婦の前よ端やこ。通言とと思も

眼を離さん産婦の都を守わり。産婦来りて家人にいへらく。先に源八めりにん讒られて。よんどころ顔の気かはるなりし。此後このめりの兼御ハ止められしといへり。此ら近隣の小民ハちは醜女およしが顔はたとへんやうもしおそれみる。源八が赤貧にて独居すると聞きて。先だし無ふ源八に縁を結べ。父母共喜びけれども。ひそかにんを頼みて媒介し。源八へも恩を報いんといへども。孤は猥褻の語を出さんば。後君命にわ論ふせるにつ。速に嫁娶とする世。親にて娶る。醜女も又母も大によろこぶ。さし信ぎちでも学ぶるの月ふつり。官に達して妻とし。孤身を醜をいとはんば。偕老の契と全く。ちよく老いけるまで射衛ふらくらくとして俸禄を増る。もとより好ふハ酒盞を貯へ。菜腹にて飲しが。此度は妻諫めて。今は諸事を節用しければ

酒盞なくてはかなはずといへども。げに貧しくて。市店にいたり盞を見て。その大小に拘らず撰ぶ。瑕あるもやしくぬ。市人なにし器へされば。好し價を出し盞を購ふてかへりしと。妻越初て。孫のうち何ぞ盃に瑕あるをとらん出しかくといへば。源八なさ購ふして彼盃に疵。盞をみて。何なる器を購ふてといふ。市人過と知り。値をあらんといふ時。源八我は欺くを守ると欺きん。ねよ盃をみんし。値を惜むあらん。汝は値を欺よう利ふ我を欺くしといへられ欺をうけされば望み足る。汝も亦値を行止ちょこられり。もあうあらぐそうられば。何ぞ値をみんとうくんやといひ捨て去る。又或は骨董舖に刀の鍔のいとを寄て價をとふ。婦人云。また他人に贈る價なれば。二緡目より三緡目といふを。こゝに源八情より二緡目と出しさへ。又一緡目

と出でゝ夫婦にて二人用ゐる費もとゝのゝよゝ
て。九人を給はなりして。奥業と営ふも價を下すゝ
和人を雇ひわが業をば二人営び。久しく商人を見と作く
ゝり。家その價と二ふたりゝ。そ家を使ふ使ふ。
手段を仕て貧乏して給らねばそこふ使ひ捨ゝ
人を雇ひて石抱り。年八十ふ歳にして眼力衰へ物とそゝ
ゝ。村時に門人側よりゝ。二すゝ二りこすゝ二りといい
ゝ。そ染を注ひ失と教ひ必中わり。むゝ浅ゝ
中ねばう失と投ゝ。吾老ゝ。ゝ人者用ゐるゝ
遂に食と給ゝ。ゝ門人来ゝ。不食。門人を三合米
国者ゝ。そを出ゝ。自粥ゝ著ゝ。詩ゝ。
一に粥ゝ二ゝ。ゝ云病食と不食。遂に不食ゝ。

原田長兵衛

原田長兵衛は豊島侯の士なり。殺伐を
好み家産を傾け。門人の献言もこれを聞かず。
門人の紙村中より石来れ老人なり。背戸の井に絲を拘
あり。その井の水ゝ。ゝ水とつゝ。
曲ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。井の水ゝ
拘れと雖。その糸と揃て顔ゝ。拘れの絲
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。絲繰ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
十ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
楽ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

後学の為よかるべし。もしくこれをいとまもなくすぎもしるべし。
さい天の忘れがたきにより、人々あるべき仕様
天下をしたがへたるの人々、その清名をしたがつて
ひとりもとわれもくとつづけて、やまでちきんとつたちまち
滅亡されしもとりたるの子それぞれ、天下をかくせ
たるなり。伊勢の宇治山田にて、ぐやうと
あまれ物を絶とつまく。みのわれらにわくたるとひさるかの
義濃のさいとうけ、粉とはなるひとかしと。をして、人
のくちびが。大切ふ守りるんづらひとやれぬ。ろよ紀ゑより
いかあるべき味もの酒くを。生をとくくくんおくるなくいをて
出ッ。まくよもいつも酒にれをいて門をうりをるん。武術とし
むくんばうひをみ物なり

龍造寺平馬

大和郡山八幡宮に多侯の仕をなる平馬。雪氣遠く人
をうも並にあり。俳諧をもぬし。和歌の術よりも思ふ
きに常ふの大小力をも自慢。ぬるを恥。
をくくくの方にあるをとを。作ひ付く。枕をたる和と
号びたるふ。和と指く。戸にとらわれべやぐ類を切付んと
をるもれるとはづしてそをとをくく。焙とすて面をとるにすて
見はるに奴こ平馬。稼くとして。みのれふにやりるる。にれど
あるいくぬ。入らぐ。ちくまるるんでくを奴が縫ふ
紙と切らんとするや。にれぐるに新をくくれて面目をく。をる
つをの三ちばるるんぐつくをくくて行くとをとををしぐ。をの道へゆる
と指へるづくあるをるふ米金の袋ぐをちてをぐれを存る

もたひ入たる穴ありけりしとこゝろづかれけん。すでに他人の家へ行さらハ
勿論を失ふべし。今よりわがなんと通よ。いざすのぞきん。かりその穴を出て
走りゆきしやつき行きたりて、ほどなく米倉の下にいたり、みゆるをとり
入れて、わづかに穀物の袋を持て、夜来りしかバ、二タ俵入ぬき
とるまれバさげ、かはす稀ぎる投出し、それよりて其後をとひけるゝう
のち川へそこへ入て寐てゐると、家の内にある人々ハ、其時も倉も稀も
切ぬきたる穴あるを見て、盗賊が部屋にこそ入けれ、おかしくいふ
ことなれバ、つひにすゝめて、ひそかに来りとしてとらえんとその他ハ承行とさうね
ども、此一事すてこそ人がうかゞひくるなり。これを鍼術の名人
同家中の浪人竹村押園がものがたりなり

杉山検校

杉山検校ハ遠江浜松の人なり。十歳にして瞽者となれり。その
性豪爽にして凡ならねば、眼は盲たりといへども、名を天下にあげん
ことを欲し、十七歳の時鎌倉にいたり、江の嶋の岩屋に入て断食し
祈ること三七日。丹誠比類なし。されば満る夜の夢に鍼と管とを
得るとおもひしが、覚るに其物実に掌中にあり。いとゞかうずける。
諸侯よりの招きに応じて、病を愈すこと速し。世に称す。大君の召
を蒙り、しばしば御薬を奉るに、我がしるしありしかば、ある時の御命下
されしに、只一つ欲しきものありと申上れ。何事ぞやとありけれバ、目一つ下され
たくと申せば、御上の人々も皆大に笑ける。君ハ感じたまひて
あられて本所一ツ目にて家一所四方給り、又百石扶持給ひ
目であるの興ずけさせたまひぞ。後又三百石御加恩あり。検
校職に任ぜられ、今も僧録やしきにてあり。弁財天を勧請し。
又つねに観世音を信じ、益感をまねし。いかにも盲人を救ふて

多し。流門の育者皆その道を慕ふ。京師に清閑庵乃跡を
賜りかれと建る。（二条殿小路の南）諸芸一流乃規矩たるに中興より
京よりも江戸よりも元本像を安置し永世を法を傚ぐ。孫にいたる迄
元禄七年甲戌六月十五日に至る。孫世々是を継とすくぞ

角倉了以　并息玄之

先祖の姓は源氏は吉田。後に角倉と称す。小字与七と云けるが
後了以と改む。（家系羅山の作碑文に委しく見えたれは略之）母は中村氏天文二十三年甲寅
に生る。天性工役によく長ず。慶長九甲辰年。事により美
作国に赴く。和計川の艜舟を見て。両川よりて舟を行ふと云
ことを悟る。帰京にかへり。大堰川を浚へて。丹波国保津にいたるに
瀬石多くして筏のみ通ず。于時舟を通さんと思ひ
翌乙巳家康公に言上し江戸にはかりしかば許しけるに。丹

二州乃幸なれば。早やかにゆるすべしと許ありて。翌年十一丙午
年三月より大堰川を浚ふ。其大石は轆轤索をもて牽之。
水中にある石は。さらにふかく足代をかまへ。鉄棒の頭尖りて長さ
めぐり各三尺。柄の長サ二丈ばかりなるに。縄をつけ索を結付。数
十人して是を挽上げ引おとす。石ことごとく砕けぬ。
あるは水より出る石は。石の上に火を焚て砕之。ある
は滝ある所は。石を帖して水を淀まし。又瀑ある所は
山際を平らかにし浅くして。八月に至りて舟をとほす。
かくて後今に至るまで。丹波世木村より嵯峨に舟かよひて
五穀塩鉄材石をはこび民大に利をうけしとぞ。
十二年の春又命を奉じて駿河の国富士川を浚ふ。此川もと
嶮流なれども。駿河の岩淵より甲斐の国に舟を通しけれ

たりぬ。ちからをつくして五のくに船をこぎ出すべきよし。
奥へくだりてらくれとなり。かれ船人の無をそこなひ
十三日信濃川天竜川をたちて伯耆の国の船場を
舟をこぎ出す。余ども船に乗り。則ち三の江をこぎ出す。後流る
ものなきはなはだしきなり。此年海内大仏殿造立あり。大
木巨石を運ぶ事なかなかなり。又仏像の雲
ちりをふ衢にて運送せり。元来仏の石地。大仏の基より
ものさき事六よりてそこをこぎ出すとうぐちて
ひろき海に出でつよ。ひのわぐれ和藤索をとりて是
をひきこぎ出せり。はるかに遠くなりぬ。ひるくれ
ちかしまばらの島となん。十六日又宮ヶ浦に船入り
和とあり。今の弓浦川也。十九年生ふさくし富士川塞

て。和のくにひなやの山をこえ行。ひとり行。ひとりあるく。病ふかれ
ちからなく。息去とてひしむ。三月より後とあて七月ふ病。何
ゆえ病急なりやきてこそふりくるにやとぞ。
ふ二日ふ殺せり。慶長十九年甲寅七月十二日。寿六十一歳。
此年の夏尾山より大熱国と走る。ひとり隙むは走てくる。
紀州侯と絶り。大熱寒の側ふ寄こ。臣綱とあて所し。
梨と林にて石誌と走る。後を遠巻よりさぐり解文
を羅山林氏にこそ走る。元和ふいく
桃巨川号舟楫通。浮鴨氷号梁如虹。刎復
鑿富士河号有成功。慕其鴨玄圭号。笑被
化黄熊嵐山之上号名不朽而無窮。
寛永六年冬十一月日

此一條所なる林先生の解文のうち一二とりて譯せし
猶の弱誌なるべし。けだしこれ
国史。島津氏の一の名い貞順。毎歌に一卷。後号二条
捉窩とぞふ。さぐいと学にまぢり。書ふ法表と著
して儒書と海ちわ〜ぶん。那波氏〜まふ。かりあと
民捉窩とぞふ中ちとも。此人の紹介なりしを

能順

能順は海小路の美仕。連奇ふまど世る稽学人。
貞享帝 たく生奇の題せる御製ぞ。おりなる
御覧と賜くる。それはふなる句。

けさしらぬ一筆のうちもれる
その後ぬ世人の相よ海ぶ。松松林流とふる

作りそのほとをば拙者の作抑ふ

拙者い為吹しく事まるる邦

とふ能順乃句とそうねられとあり。紀姓藤
句集ふ。宝永三年丙戌十月九日。七十九歳にて没ち

村上等銓

村上ふ名は平安之際池小路ふ世く医と以業ふ。十六
家ふして寺ふる。古二家ふ
東山院の望ふ御急症ふ切と奉し御ふ法服と賜ふ。後
は侯爵。春嘉院の三宮の宸筆と賜ふ。又 御製と下
ふる。そ在ふ松樹あり。ぞ。松ふる枝ふ以類ぞ
思考初ふ。そして御製と注せ。ぞ立ふ。を松の
御製ふ松ふ。能要等ふ。家ふる。ふ。ぞめ

そこで。けはてれて大膳こゝにうも貪ごで。毎時度時度
の不例なれば。そのこゝろは面白かるもあまと形よつゝて為り
しらぬいかゝやうに。備前の沖ゝ皆海よ投捨ん。又嚴度度
乃函療せ付も論ありゝ。寢ゐ為らゝに仕ゝでよは御国
ゝまりしにけ下指ゝ所て。御国の場うけと所ゝもしゝれば
ゝゝうゝらゝ今ゝも技おゝもゝてんゝゝもゝ。そゝてゝゝ
と仕ゝれゝゝ。今ゝ日ゝ大鄭ゝとゝゝゝ
場うけとゝゝおゝ。ゝ程のゝゝゝゝ。医術の
筆紀若ゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝゝ。皆焼ゝゝ。
仙寿事ゝ為ゝれど失ゝり

葛溪氏。ゝのれ幼ゝの時吾ゝ為ゝゝゝ女ゝが癒
ふゝゝゝゝ。ゝゝ為ゝゝ。ゝ初ゝて

そこに松ゝくゝもゝゝゝゝゝ。ゝ耳聾ゝ老ゝゝゝ
ゝゝ。亜科ゝゝゝゝ山科ゝゝゝゝゝゝ

三播孰齋

三播帝賀字ゝ善藏。郎壽の好ゝ。ゝの孰齋又形
科慮ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝ
ゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ陽明氏の学ゝ
為ゝ人。京ゝ謙遜ゝゝ通ゝ徳用ゝ。京
北平東京ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ。長沢の南ゝゝゝゝゝゝ酒井侯ゝ仕世書
新ゝ著明ゝゝ中ゝゝゝゝ学者の病ゝゝゝゝゝ
今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
事ゝ物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝのゝをもねがひとし。ゆゑに世とゝのゝをもねがひとし。ゆゑに
うゝ人をまなぶるゝ人をみて。ゆめ〳〵名聞者のまなびをなす。
能とりわけてこゝろ天道をまなびゝ人義をまなびゝ。世をと
るの子。文盲よみ人はなるして知とさいわんとて。事〳〵
物〳〵に道理をあらかじめ。国郡とうるしく物を
探るがめし。こゝろわるかるといふべし。なほ自得の学ふ
なるべし。和とゝ人我の隅出まり。人欲の私邪ひとゝ。
寡欲猶置して。意必固我とうるべきなり。あるべき諸
とゝいたやう常人にまり丹まり。世を為る師に法をまり
ひとゝ。人欲なれ〳〵なれ〳〵を為る為ふ。
除よ。人欲なれ〳〵なれ〳〵を為る為ふ。
中にも大敵〳〵なれる臣親こうるを文欲れ欲れやまりとゝ。
とるわるまるわるわが。其知に知ゝ知ゝ己が欲とゝ。そゝ。

るゝりくとうるゝむ。ゆゑに人をまゝうるものわれがそれ
ゆゑにわゝと。ものわが欲とゝ。ゝりくとうるゝむ。
たゝくに食い民命をとゝ。ゝりくとうるゝむ。
つゝも。食ふ傷ゝしくゝ。食毒とゝ。傷ゝと補ふて
これ食とゝもわがゝりゝ病と物ゝ民命ゝ。
ゝんとゝるゝがゝし。ゝ男

其ゝ孔子門の人新とゝんゝ。著述の書い易ゝ記
二冊日用切ゝ一冊。堯典ゝ釋一冊四言教解一冊傳習録
解三冊雜著四冊教録ゝ一冊ゝ。ゝ写ゝ。
ゝる人勢ゝ。老儒稽斗氏ゝ。ゝ
ゝりゝゝ。ゝ和ゝ。ゝ儒ゝ。ゝ
ゝゝゝ。新著の中ゝ言教のゝ。

思うこと。[illegible]陽明先生の説也

無善無悪心之體

りあもいうようんようもいうようもいうのれのくて

有善有悪意之動

そこわるくそこぐそこのいのあれもんん

知善知悪是良知

ようれいうけいかぐ紙はれそこ洗ふるれ乃洗ふ

為善去悪是格物

うとうとうとみるべうのうふうとれ善も洗

ことになるこの善悪にとて洗ふ乃洗ふてぐひかうぐも

そしゆる和善のこと

ほうぐと洗れひ洗ふうとそうそうはそふそり

けちのくれ和久い遊ぶよりのとと。ぬ々洗ぶ。まひーうぶ。されば

遊ぶえとぬ洗くぐ。ゆよるそ洗とはぐとはぐとよはれうぶ

そんいうくにうくとうはうくど。ぐふも洗るくればさいくくし

くぐとのくうびくくで富貴を洗和久と遊ぶハ迷世のくくれぐぐの

ぐも洗はれ和久のくさいくくくくうぐりとうくど。

こう梅ぐむ花が洗ゆとくとされ門ふうくれ枝いるくくも

こう梅の和よりわく家のねもこくのうれと老の

洗ふこうるちはくくも無うぐ。建仁寺中ろ院より先人乃

墓あれば七十一のはうぐれ墓とも筋さ。自筆をくくそくの

うにまはられ。

先人塋の後に予が和の位不笑くくり。幸ふ杉の

二ケ所ありもたぐくくれば

たゞちねりつきも身とおもひつきれ是ぞ一つゝる枚の二本
契み見ありけんともちょうまよわかいづくのちらしうるとも
元文四年冬　希賢七十一歳書
後又是を読して寛保四年甲子正月九日に没す。享
年七十六なり。是ハ此人ありしとききに翻せむ。蓋
読書よろふ。雑著中養子の辨並辨ずるによつて仮名之
の書あり。己の見識とおのれさる。苦るれ他の此
翻しむるもこれなるへし　養子辨ハある儒生著して他姓を翻しとすすむ。これとやさし辨
せられしるが此義のえらび
因て此を此義高貴の御前へも告げく来
らわれしく閑居なりしの后後南部
一乗院宮へ来られしは賜りし御奇

峰の雪ぞ乃ものの柳ハさびれ是へなるにならむれ古に
御うたしまもれがそうましへらしれ是るうと歌人ろうるね

松岡恕庵　附　稲若水

無名庵松岡氏名ハ玄達字ハ成章。怡顔斎と号ス。京師乃
神道を学びてハ真淵ますずしの湖洲の翁より。平安の人。其先ハ尾
張名護屋よりて出。後平岡氏より出たらそれは本草者ナリ
あらず。儒家なれども。詩経の名物を闡らむ。稲生若水にまさ
ぐりしたがひて本草を一遍に尋ねしが。大方諸説ひて。但此後藤先
ら適ぎいふ本草者ありて其名ありて人生きりふ
本草をさびし給ふ業とならむ。その志をわれぞ。博
覧好古但是後横の人なる人のさる意でとも子年くる
二三條を著く。大さ多の食を立つ。且つ漸の書一つん

国書とゝのへられしわざのこゝろ
ゑのふゝはり目わゝれ口ぶ男ゑ
のゝこいとゝんをゞ。袴も麻みゝ
たらぶやわゝんゑ。ゝそ。ぶゝよ袴と
もとんそ。ゝれに裃ゑもの海原ふ
ゑもの側よわゝれゝぶふ本帰の布
みもゝゝゑゑい波ゑ。ゑゝゝい奢ゝ
ぶわゝゝこゝぶ。ふゝはぬ僕とゝ
ゝ。ゑい集ゝれい波よゝゝ。端猫の髭
皆おゝ。ゑれゝゝとゝゝ。ゝゝ
ゝのゝ。ゝ如ゝ端猫の背とゝゝ
ゝのゝふゝゝ。ゝ国ゝゝ賢ゝ
のゝゝよ幹ゝゝゝ。ゝゝ

国立公文書館
National Archives of Japan

けづりくはへもにてそをもて金箔ぬりたる紙の細工物
となりしは。世間紙の細工のとあつめ宮ふりぶぐ。さるは又
年とともに。ものりふ白紙のつめんけとさらに。如意のしと
えをもてそ。せんとは紙い細工物をうりしにそもとさんぞ作
をれば。ばくらいもそもそなく。もい紙ものいまいて。
ちくしもくと。差くをれば。さいとはおうよるべて。河ろとぞ。
みちろのもちを。書せみりく異して。ちんにめとる遠中。
もて毋のくちとはゆり。やねのえに猿のとりる花をふ。
竹の葉とれる。賞のりぬ。ぬをもとめて。書せふ賞せ。僧る
ろをせゆく。一所生りめていろ。ろ手なるみて。
け猿いろ。造りうをなど。余ふるりるが。僧がもちる同
ゆくの紙よりてみわるとるとべ。書をるんしてをとうを

してをもんもめをせるるがけるびいもものどくゆるものる
くを。やねのをに猿のかるとをもりるをりるをんをみ下紙が
をもわろりをんのひいふいふいよ。いをもど。猿いやねのふおるる
ふもいをどひたりとわるとを。書をるい紙れせられんをといて
ひを。をもちどいるをいを紙ばいをれいをみやをを。又
高のどくをもしものをで。をるすををの人をるりとををど。
芋絵云。紙の年も猿のちどひをもをををれどるを
をもじ。数きをりけく。ゆるいい表ゆうの表をれるんを

国ふを。猫せ若れを宣義字い彰信。ばしのをるり。
若をのをとをれをせしをを紙い月紙をりをも紙屑を
ををしをも力と学をれば人語をやをむゆは　名命をりて
詩絵と海をしは。ををよを歌の。筆ふ井ををれば同
をして紙をを。をを紙順落る力とををををられをを。

よべ庭あとうくつかれ[illegible]り他のなどわるよわるば。
加賀の志ゆきもり孫三百石と称へ廣面類纂いふまる
る来と称へ。源平制度ともに自筆まつ来る。ふるい
いと宮有ふり。面白いものなるべし。始らくいかるべ
又旬よ海をして迷とと。白石さんもあり云りしうば。
世ちと又旬ちつばてる巻の書と編む人古今たりと
守だと歌義ましこと。蓄候按新あるよ
簡よ千枝考しけ係者ちと絵
筆庵の集。絶交全書等ものなりわり

三宅石庵

石庵こ宅氏名い正名字い貴又高平と号に平安のくより。
寛文又年正月十九日に生る。元年六人ちつ中ふ。牙觀潤名の得名字
俳諧信称
九十年やけ元禄よ号とぬる。為人沉静儉簡うて英敏剛決。

御もづて家庭脆亡し。病備とみて強る金十片ある。元年牙
ふ新ちいふ称ちる不後ちといふ。
と並べて寝食ちと与る。ちもいちばるく十片の金ものうし
うべ。元年牙と称てふ遊ふ。ちりふ不ちる。牙京潤と
称ちる自ふ方よ洗れて。ちる手ち徴法よ不邑事ちいふ人を
名と慕ひちまりて。ちちる国よ使ひしうば。ふ家ちる事
四年。元ちる。ちる法にまりちる。ちる称ちる。ちる
法内ふ嘱ち。門牙ふ月に盛ちりうば。ちる法華に学
場と設ちちとけちる。関ふ訳ちる。元ちの名りわちり
台国よまりれい。邸元名と称ちる学湯の地と称ふ学ちる
元ちと称法ちちふ。国辞ていちる。我ち不雷則ふ感と
且い称氏の職まちる行で称ちちる。門牙ちまいふ。ちべ

先生の節儉を学ぶべし。孫[illegible]教授維う深ざん。布衣と
そうく様深くつべきぞ。ほうこうの道なるべし。化育の道なるべし。
家く言と云て詩に作る。絳[illegible]ることなかれ。第ふ應ぞ。ちも絳ふ
こと年のうち享保十八年七月十六日病に罹て没す。行年六十六。門
社先に葬る。生涯布衣にして。ひとへに道勤心錬ぶて
ぬくぬるなくしてもくさ復宝といふべきことなれども。
市侯と用ることなし。凡そ貨ふとうるなく約ふいりとして
国歌俳諧も嗜ましめず。詩書をもて門人まるもあれども
其人道の法と貴義の新を述べ。さらに他言とかーつぞ。
婦人は品田氏の二男二女を生まるふ生ん
ことふとぞらてるとそ。求ふ生二命和い正注。又の西と継業とを
て讀書堂とも。今の今猶乃学湯ちり京洛の牙逸十命紙祇号佩葦

も京都ふ遊びぬ。ほ戸後よはうて早世すとて

素原為濱

名は字雄素原氏。乃濱は字なり。毎年雪羽。
法華のくく親兄の家なく。為人清廉陽探を。篤練八
分の諸術と極む。初ノ法本正直儀を尊ぶ法華宗にて学ぶいでも。
自一家と称し一叶を明ぶ。今より学ぶ為し。ご海と社し。老荘とを
とる。生涯まと高ぶる法。人をあれに遊しめ。洛西泉谷
乃山中に居を結ひ。叶ぬ物業に。又に和書即門の
光淋が遊し。家も住りよ。叶家頗風流みて蓮花を得ぶこと
ほや荒ら松山就水の麓寺常ふ。光淋月西の清みもあり。
中も深ふ求めぬ。常ふ法に。年を終ぶとぬ。洛
とせ学ぶとぬ。

下村道端

道端下村氏号春之。因治の者としやんゝ。ゆゑ京師に遊びて。盤山水尾保之丞に学び。又学問字部氏由的に問学まうし近江に帰る後は仕官。治部殿社回忠八幡宮に捧げ奉る。老と共に拘れを制して第に代へ保養されよとのたまへり。保養のなり如。九十八六十七なり。療治も一用あり。病人に多くもちやうやいてもくとりなしといへば。療治療法に死に死くといふ。ちくぶ氣象法よくしる。自のてたるもねと言ひぬ。なにせの学ぶ事とぬまば。他は小児のごとくみなり。そもそもする和詩文の書伴みて。古々乃詩は双考多い額と改め。系と引とあらはし。詩家音律と以まと考もて。色い漢の沉約が八病とて

古人の詩文に出はあり。沉約も五色の法に自然の音響節養あり。沉約も示されよりり。八病に結に出病と通ずるといふ。八のしんりきとしありといふ。光字長猶病造の病れ字のごとし。平法に双考多い額偏にあるは音響とのちび。奇偶相為て考は懸ひ化双考多い額と為る用たるい網急ゆ。緩急用いるい網緩。緩急の抑ゆ如あり。唐古牙歯候の五言平上去入の四字抑ゆ。自又来とれし抑ゆ考あり。ゆ抑用紀のまとつね。唐古字のごとも用れば。吃結ゆりて節養ゆ。及切ゆりて五字の字法。詩賦の双考多い額ゆれ節養の為ゆれば。そふりて通まべ。ねゆまゆれ全双の法勢に乱系ゆ。けけふりざれば。門ふふりて門内と抑汁ゆ門酒と海ゆふゆゆ。

又楽府奇曲の類は。うたふうたにも作者の意にまかせて作れども
音律は常にありて。倚声填字といふ。其調に随ひて字を
の法あり空圜と作り。其声にまかせて文字を填るなり。因て詩の
あきらかなるをもつて正変を可知されば節奏あるものは君子の辞
にたがはざるべし。詩書を称し経書は京を行。双声畳韻を作りし。
詩も歴代を損し下も李于鱗王元美など出るに及ぶ。其を罔甚行はれ
あらはれ着く。皇朝にても昔は此法正しく菅江諸家皆此法は
よく守る。三百年以前の薩摩の僧文之なども四書に文之点といふものあり詩文格意
を用ふ。近世は近体の詩に平仄を用るのみにて。此法を廃
しぬ。いはざれば知人のなきまでなくなれる事を嘆し。今の言語も
是をもて大息するなり。若欲かの杜の日此病なる思はれども
ただ文華のみを飾る。日本俶客の詩は字をも悦を学べし

ど。名其法ふ泥まんとなりて。頽廢の想を生じぬ。この書
を集校して世にあらはすべし。此書を發て又いふ人なければ。
後まで之れを補を乞て。後来を世にあらしめんとおもへり。

詩家音律凡例小引

八病在五字内謂之急在十字内謂之緩緩急之度
謂之節奏節奏也者其作詩之本歟豈啻詩已凡百
散文儷文亦皆雙聲疊韻也耳而今吾邑之士絶無
講求雙聲疊韻者余甚惜焉故著茲編并凡例云

泰宇下村道瑞謹識

沈約の八病も出されたれども爰に挙る

平頭　上句第一二字與下句一二字同聲

蜂腰　第二字不得與第五字同聲

上尾　第五字与十字同聲。如青青河畔艸。鬱鬱園中柳是也

鶴膝　第五字不得與第十五字同聲

大韻　如聲鳴為韻。上九字不得用鷺頌平榮字

小韻　除本韻一字外。九字不得兩字同韻。如逢條同韻也

正紐　詩病有正紐傍紐。謂十字內兩字雙聲為正紐

傍紐　若不共一紐而有双聲為傍紐。如流六為正紐流柳為傍紐

奥田三角

伊藤の儒学奥田三角名は士亨号は春甫蘭汀と号す。又後

古学者の説よりなるべしとも南山の号と称す。三角は亭の名なり。山崎の後伊藤より出る。小倉宗家後法王寺とも云。

其先遠藤豊系より出る。伊藤に属す。柳田川の上流家也。

始めそれと共に豊系より好し。累世土着の一名家也。義初

より学問となる。同国宇佐よりあるべし。表敬蘋洲の門人に学ぶ。

のち京師に学ぶ。三宅石庵の門人に学ぶ。蘋洲告ていふ学者西国より天下第一号

人とせられ人といふべし。後世学ぶべき京師より伊藤東涯あり。学ぶべし

九州にあり。浪花の塾ふるはず。十数年門を閉て

[illegible]。法門を閉て[illegible]

[illegible]。浪花より出られ[illegible]。屢代海と命ぜ

られなば二子にて[illegible]六姓と称して後師のことを叶ふ。[illegible]

ちなば福田必寄任ぜらるべし。九州にて藤堂家代学職の筆

られ給ふること甚し。四君は歴仕優待ありしかども、正法のために羅遇多く、ひたすらとうしてのがれむつぶるにも、剖析なりてあるを庶もとぶ。然もまたよく行ふ毎に咽ぶ。ひんまれに睦まじく。作ふ場まれに行ふ。凡そ世に裏いろく慶弔。なほ士としてもまた知ることなかりしと。ひんせ言ふ保ひ和のことなり乃ち兼ねおひ。まことに師を尾とうしてひん裏と会毎でに辛。かつて裏とつとめられまず。そもそも節操とうるべきもの乏なふ力と用ひられ難き。博学強記もまたとんの家わかつ。詩文一家乃ち作とまたしたり。ただ拙敵と用ひ人の需なるでもとどころに成。文章ふ井おそれるひんとでめて毒筒紙と考び。一篇苟もせど。清うして章ふ三角集を異とす。識者鑒別しまし。ひんすぎがきとはもとより八角を及ぶ程供だ。

著述のつとめられざりしかども、和漢の部おりしが、皆一時の戯作にして経家ふ及ず。門生ありて和書の注を乞ひ、ひんの師乃遺書をもとり。我軍地をさへくにあらずとも、ことに有りれば、欣然数十編と排つて展べ、毎指みつしを古稀みるとなりて、ひんの洗ふと作ふ眼読と用ず。そもそも事のいつるを求まるとも、乃遺作ならば。作ふ人のまれに紀。徴る場のまれるを知べし。七十七にして寿稲を作り。自ら沼と称ひ。身後遺命あの言ありんとみるとなり。易に貴ること八十。豊原橋山ひん墓の側ありて、山建る石の墓碑の下に葬ること。著述おのづからにして名をとどめ。又近代三角集とうんぬ。ひんに情儒にして俗流をとる。ねよ自撰の墓誌をつくり作ふ。ひんふもしらべ。彼門生所材氏見と写。ひん

新愛見やすらるるを掬てしたせられ侍とかゝる。
三角亭記の基沼をうのせたに掲ぐ

三角亭記

余嘗於後圃中開試馬場長不及五十弓廣僅可旋馬傍植花卉外鑿芙蕖溝内築小堤偶記俞退翁三角亭詩曰春無四面花夜欠一簷雨同話録花為龍作余仁廓余愛其句深服其意凡天下之花無四時無五色雖有鄭躅紫燕稱四李歳中三開耳余家五色梅分淺深紅足數何索墨梅何貪四面竊思三角之為物則方之半矣缺盈之戒無以加焉因欲倣之構亭於西北隅庶乎不妨旋馬焉有志未果客歳病眼折足不堪騎乘遂放馬徹調馬場鋤為菜圃今茲春既有入告曰有廠村價不滿一貫文盍安堤上也余心搖焉召二老僕謀之僕曰不用請陪其價可辦矣日亭午此去神山幾里春水方張編杭乗流二人而足余從之薄暮果致杉村十餘根於門下明日召匠構之曰務存斧鋸痕謹勿施鑿斲不日成之又翌日葺茅至三日落之時三月十二日也掲蓬窓子扁忽官書至飯于亭帰于府他日心常在此亭七月之望帰郷坐卧亭中仰看青山俯觀紅渠始償平生因為之記云此段九百乃家流三角の亭記なるべし。こゝに遊ばれたまふ。一奇事なり

三角亭詩

桑瓠空負四方志三角亭中夢亦奇忽怪蟲聲開一面深歡月影照多時人間交際重謙損天道循環警

滿虧窓自不妨八風至抹頭長掛退翁詩。

又

三角亭中獨煎茶人言封閉縮如蝸。直方難處下流地。圓轉何停峻阪沙。有水有山常可月。無冬無夏永觀花。比年患眼偏嫌白。藍紙粘窓同碧紗。

壽碣銘

奥田士亨字嘉甫號蘭汀。亭曰三角。南山古稀所賜號也。小字宗四。宜休大人季。為伯龍溪嗣。服嫂堀口氏喪十四遊學宇治。十九上京師事東涯先生十一年。廿二命校名物六帖。深叶師意。爾後編述必專任焉。廿九擢津府賜十口俸。戊午加五口。甲戌蒙命校明史半年。句豆竣功。癸未領百廿石。庚寅東下留枡邸九月。壬辰班掌鎖右。褒學術也。甲午轉中廳。賞蓄書萬卷與家丁卅負器械也。丙申告老。尚賜退俸十口。隔日入侍。或至夜分。所賜書畫扇巾衣裳至襦帶山積不止等身矣。今茲己亥不幸會嫡士元喪。忝蒙兩公存問。仍有花餐賜。臣庚之家未之前聞也。時歳七十七。先嬪土井氏二男。次曰正集。冒岡部。三女長配任士弘。餘夭後嬪細江氏。一男曰叙典。冒吉村。内外孫十四人。帰孫七人。五十年來門生踰八百。今存百數。身後恐或溢美自撰壽碣銘曰。

起于田間　升中廳直　何以得之　聳古之力

加々美樵鳩

加々美伝治字源光章。樵鳩と号す。甲斐国山梨郡山王住

況の神鶴さんとうより沼東恭敬して博学多聞。国学は
さうし。儒仏道家音律方術天学勝筭等の書をも聞れ
て。和歌は風体高の義をふかくし。又学問に宅南奇なり。
初め貧乏して沙弥。後に僧侶となり。その先とたの子孫と
なり。学問ゆたかなり。清国九十年ばかりの間なれば者多し。神学
指要とあらし学行。余は脱ぎ。学者七十四歳にて卒す。
平生一言を発するに皆服をなしいる。ちふ話一三條と著て
その人となり。門は山陰集といるものあり。かれ甲斐乃
産なり。学問後に弟子佛徳と号す。物をいて学術
なり。国学は解とかれられ。好る刑きうふ学問
世義も出れやけの彩りとうけ。廳へ入るとうしがいくほど
なくて。国ようると。その者酒者と商しまうと。恵るたと

被れ来ると役く。酒屋ようる時解ていて義の関ふへ入れたるに
ようもいて恐ているなり。又ようて居るまるかいたりおいて
も無ているなり。此何よりいりて。若しいて。秋すれ牡丹る恵をしう
まいでもれまようよう陳蔡の厄たりやてられどふ恵いて。
もれより学問のようもれいなどら解ざしてれたりしいたいこけても
まさなるよ恢ぐてふあるいぐいけるり迫よるよ猶定
ありそなるいぐ神とそなるび。浄衣とそ高帽るとりいれて
朔夕中居の被とし。常ようぬいづく。恵はまりて神乃の
事と学。義曰。神乃い神祇祭るとう学ようるいたりて
家業猶定まれいなれさうく。元神乃い天まれ治めるのようと
以ていかに神乃ふるふるいぐ。猶定の神道い西直正流とし
ようく家業とはまるり。又母ふ者と卑。朔夕之祖の位解とを

て。ものくらふものも。祢とも佛をもたづねやまとなくいたし。
はづかしふ身の浄祢とそしし祢とそしむこと。かついまそれをし。久
しかねむべしとこゝの。頂をもそこをわりふ祢。往生のわとく。
る祢るはうて。者とうし。祢とぬうづくの子をうべ。ものをもたし
くるとそ。まると一書生まりうといく。おのれ久諸侯のらふ意び
醫官に命ぜられ。祢とおつりとふ祢ゆく。丁祢まをうとく。
祢生の家ふまれうく。髮とかて偽祢ちんとものとるべにて
くれば祢しまんや。いうくと向ふ義曰。汝祢宮の家ふまうといてで
三男し。ねる家事にあつうべ。醫を業とするいる文の命ぐ。法
侯ふ出仕て偽祢となるも。生徒を納しむふわうべ。出仕の者れ
呉太（ばくたい）るり。當時宮家をうとるるとと出ふ出しめ行ふ倒あり。祢れ
べうふ者くるを祢もなし。ふ一法て出られと。言に出ふくうろ

うく出仕をしそ。ふある時まる生る集りく。唐山と我邦との
生形く。ふ和多おと偽じはまてにうつりられ曰。我邦い
もやをうばの國なりく。ふまうをいはくそをふ武ふ配られい
者邦い武國し法陽ふ配られ我邦い湯く。酒い祢るふとそぶ
ものふ。茶木の祢をうるうく。笑り。唐山い法く。法い祢をそむる
ねた。竹木実とうく祢ぶ。法の法ねふ物も多し。也ふ
國のをうくと判ど。そ條法多られも都ふ。思者ふを祢
寄とをくゆりむど。結造判をり。そ中て寄一肩記性しる
とをうた

ありの鳴りに身無山ふゆをうるくと歩くら
ふにをうをのぶりむふもをうまれ久をそられのをもをうくと

一祢梨一

一林栄一は江戸の人。性廉にして家貧し。書のみ能し。
凡世の人事を都(すべ)ておろかなる事見をいとひければ。隠操ある人なり。
越前丸岡候の臣たり。仕へをはなれさせられても。固辞しける
けるに。仕者縁(くう)りなし。一ケのおもてもたず。やむをえずそれとなく家名ぞし。又何
程の禄を元りるべし。それもかつて勤仕(つとめ)の労をおもきんば。今までの
姿にてあらむ。ではその比又申せし。それにて丸岡より仰ぬ。さるから
儒者は用ゐに清くなれバなにかはまた同事ありけり。それども一
段も出仕することなく。又ものへ名あれバ今はとて侯栄一に
儒書の講読を命じまつ。其の外も常と共に丸を寡りして
なれバ辞さるれ不審命は独きんとし。されど聡ぎしのなかには力
は今になし。いかばせんといふ。それなら安んじて。に仕学の士
より佩刀を贈りたり。不覊にして洒落なることをもてしけれ

なり。かゝるまゝに俳諧をもて人にまじはる。されどもその頃のいふ
著書あり。又むかしの奥の細道を注しけるもあり。俳諧は
ことのほか深の蕉翁は師。伊賀人の桐雨といふなりし。栄一が
仮名をつけしにてはよく丸岡のこととて栄一をかたるにのし。
家もまづしかりし人にかはりてもなかりきかな。栄一もの崩(くづれ)てし。大
乃母に先たし家ある。その跡より覗(のぞき)されば庭にはえなきぬ草木
茂(しげ)りて人げもありやなしやとおもふばかりなるに。伏ねまで多く
積まれバ立ちどめて栄一が家なるべしと。つゝ今も門ともし
に。さてこそありけるも。一時越前の其後は其の代官なり。
国中の者云。此親では子もその代官になりしといはずし。あるいは秋収をゆ
此事とて人なくしあるとくつく君命に無りしやまたりながし
ともありしが。その正直なる事をしと百姓人々に感じて。栄一
が名を唱へて。その気と崇(あがむ)。されどふはまつりしとぞ

百年濟雨

百年濟るの雨降たんこ。京師の人こぞそれい家内の豪富高
屋いつぐ出もとしてきろうにちてゆきつく。富ふこうこ
ハけこ〳〵富こ〳〵。和れども年ふぶがうねべ及めこと求んち。
秋気ふる和山形県とぞうれしむるこいきとて。金三十片
と持へ。ふこハ薩摩ハ河。ふハ奥州かゞ濱乃ときこと窮む。
そ就年ふいこ〳〵も稿と脱ヒべこの中ふ奇ふこふ富士
ふのゞんこときと遂ひこそこ出ふこ暇所をさるふこ
数日。ヌ四日ふ乳根病ふてこ。ふ出も宿こ。一ふも進れ
ねべこそもれ出ぬべ今れこ。ふこふ。ふるんち。ゆゞくハはのふる
出ここそと。富士様況ふわりろゞ。そるこそこれ見こ。のふ物
ふこれべ表のふふ出ちく濟こて。本年乳根の日ふ。ふうこ

間ぶ渇ふられば幸ふよと伸べて。けふと一宇畫ふ。其さるもの
へかり。まわりのもの高のとき呑くしられば。魚牲弁妻ふまり。
もりでやめぶおいれの魚くとなるる。又嬉所とそこ
そうなくいるよ。名のわるさに小家一つんもだりられく
こいんとるに。ふふしてるる。思惟してそふ行乃
きるる。そねよれ仕くあるれば不思議ふ美のむふ乃
地よいるりぬ。ちくかし一りに人くふくのくとりる路
を向。わるる。ふてい木越ふがもふふるよるぬるを。
えんを来い休るるくりる茶屋そん。粥るで焼てるるへさ
まるのぬるりするはいる。けさいるるくく自家ふりりやと
りるふ。ちてかくはるくるりるふるわくくとこへるふ
さふへるくくなるくふ。彼蓬萊山ふ甘嘉わるくやるる。ら

ふもるれくもゆるなれば。富士と仙境くいるむるれおや
えしそれる茶屋とるくくる嶺と極めるくなん。西海ふ青
ゆるる嶽乃天の逆浮をるんと。三度ばるのぼりる。硫黄
乃気に不堪ているくるば。ふりんは白るりふ。ふるのると
いくくるる。実に遠都なれば。ちるくくふの真るるるくる。海
雨三個ふ帯の逆とるくくに流ちくれば人くに行じ。ふるば
やるるくふ年。今やくくふ字の事ともいふくるへるるくふ此
老の切くるる。ふくるめ醤ふれるるのふとるれくくるば
いるはとるるくるるふ。ふへるくいるくくあやくぬ。海雨るるる
ふやくくふるふのるるくくあるるるくくふ。ふるるくくふ
なるふいるる海乃山乃ふる寺くくくくふ。ふふ乃ふるるくこと
趣じぬる。けふ寺法もふるれば明治

いと美顔紅色。両目なよいて。此人系よりてなり。りの兄
あやまりしうべ止事とわいど。ふ色ふさら入とくまをと
ぬかろうるひ。ぬ。そ引て況さ。ようるに美財と賞て
ととめ。手とあちる宮。又そ女の需よ毎でぼく
しぶの泥れ又と行て自立ものと著せりぞも
行れてこれと添前。嗟ともかよりぞりるき老人
るりしが。ぬ。ぬ。ぬ考碗鉢乃考んふいぬ。ぬりてれ
取れたり。一生風流をつくしたりいるべ。若顔そ
退ゆるは情と紅ちとりりがられも示ほどぬく用ど
ちに逝けるも美色なり

其湖庵社い

其湖庵社いい生涯俳諧をぬきとと句もも多うり

けしの退隠とる時人の行ひふちさへて
くちるいれんうたもちぬはるるう邦
此句おもわ。いれもてそやして賞れ。雅俗国見の
情ふ人ちて話ぬ。ろかりかぬ。老後耶聟乃
有ふ。の言古文書のめてきと写。又鳥之国し
ちぐまと筆ぬやうせて。つれぐとはと。後ぬふて根紙
も強りしうの。凡二百考ぬ。ぬ考ぬ。相撲の人
ぬのぬふあるる考ぬとりてぬもちぬ。八十
六ちてしみのちちの紅石の数よへられし

渋野瓢水

播磨加古郡別府村の人渋野新ち迎。別駅しぬ
自得ちいい。富士齊郎瓢水い俳諧ぬ好ちるるり。

よ石和七渡りてうたの豪富なれども遊蕩のた
めに費し尽し後は貧窶よりなほ浮世家ゐ
酒菜多し。酒半侯初め昭へ対と称し
るるへうは。瓢ふご風流と呼て。領地と巡覧の
ていどを定ふ略とそめ行よ。春よりびて瓢ふ方
そうれど。不興して帰城しるるは。三百と称へかうしが
いたとそふを夜月ふゆうるふ。頂廉の眺め
ゆうくて何なくしいう。又迎村乃小川
の橋を渡るとき踏くづし岸へるとそもうの農
家ぞわりえ知られば。ばるよ。あるりおけんと世
ふいの中は長ふ情の餅と称ひてあるとなん。
京よりは貧を憐へ。如流という画図初稿や原ふ

数十張の画とあるへて。ふ發句と記てくふ配り
給ふ。洋多の物を得給へ。春ばよるび情よ
して去りう。他ふ先の画いうでふ記して
そうたふれおうりるへいづふ義せ。ふ流
うるめに面るへ乳色ふれ。ふ行人ひけ
ふりふいいよりふ行きう。ふれ頼ふ
うるのかー筆
ふる春と家へふれは消しー岸も他味ふ付ー照のうへ
伊勢の大神宮の句　名いまたひぎの鶯乃て磨という
ーうるへまりー　ひうるへ雪ひいうう雪の紙
大坂の知己の者遊ふ所　よにれるやうりあに新蓮華草
ふんといふを得ー
毎の裏ー春へ　ふればよて行ふうんも気せうれど

駿河の白隠和尚
貴人(?)の句のよし　きてみれば憂(うき)は常なり花乃春

達磨忌に老背面の
画に題して　歎ずれば花も葉もなし山の峯

京乃巴人といふ者の病まかりしに伴へるに
土やいそかたりきて
嘘(うそ)にしていて笑ふまでの時雨

生涯の辞世
人乃いふは　ほろ〳〵と高き(?)は須磨の蚊生(?)

七十六七ばかりにて終られけるとぞ

高森正因

正因高森氏号寂庵。本肥後国阿蘇大宮司三家乃内（阿蘇村に高森といふ家を称す）高森の孫にして。紀伊国に生れ医術を業とせられ。又仏法に帰し。いまだ若くして一切経を閲(えつ)せまほしく思ひ。京師にある道淀河の舟中にして泉涌寺中来迎院に不図相見して志願を述。院に蔵(?)て

いつは吾院に寓居(ぐうきよ)せよとて誘(いざなへ)ませて。ここに寓すること二十年。終に閲蔵(えつざう)の功を果して後。此寺近く伏見街道本町に居をしめ専ら医術を施(ほどこ)して技妙(ぎめう)にあり。其一をいはゞ。大和高取侯の招(まねき)に応じて赴かれし時。病中きかれ給ひぬとせしかに。病はおもりまで遠路(ゑんろ)来りし甲斐なし。空しき御体(てい)にても一診(しん)し侍らんと申して診(うかゞひ)て曰。猶よろしからずやと。再び薬を進めつゝ忽ち蘇息(そそく)(ヨミカヘリ)し給ひてなん。此類枚をあげん(?)。大によく和歌をよみ(?)。又からうた国歌をこのむ。時に霊元上皇。仙洞に人麿の社を造らせ給はんとて。あまねく古像を求させ給ふに。正因蔵(ざう)せる所の像阿蘇より伝来せるを奉られしに。甚叡感に愜(かな)ひしともて。

許多(そこばく)金及び本町の宅跡弁庵の祖と號(えう)せられ
新醫(あらき)人なるとまうし。其父丸貴命乃字の
宸翰を賜ふ。終に法眼に進み進む。且和歌を嗜(たしなむ)みし
叡聞に達しければ。某卿の傳奏にて自詠二十首を
奉りき。甚奇特なりとぞ。東蘭亭の号と號す
ありし書院乃名なりき。凡生涯の菜蔬(ほうれん)の
ふかしといへども。然れ不犯(ふぼん)にして長齋(さいじき)食し
精(しやう)ぢんまたかたくまもり。魚獣の肉を食はず。殺
生にあづからざるをせしが。寛永の(きまん)頃より勝手
殺といふ薬を製して病者に施すなど善業人の
仁ふかり。七旬有餘にして病なく自死日を知り。
法服を着し端座して逝りぬ。醫術の書は

其家に傳ふ。一生不犯の人なれば子なく 養子家名を續ぐ 和哥集
は一旦下りまいらすといへども。火のために亡びうせぬ。此ゆゑに
の人乃書集(かきあつめ)るがありし。こゝに其わづかに集めしを

早春　春くれば雪まにもえ出る若草のうへのけしき

野花　日かけの野にさく花の色をそへてこそみる

山家月　よそにのみ見し山里の月影を

鶯　鶯宿の花をもこえていづるらん

不請人 道場　うきよのほかのゆめをさまして

あかさればなかに

かくもこそうつむ

端文仲

氏家伯壽

端隆字文仲通名順脇。春莊と号す。書林たりしなり。
隱操ある人にして詩を能くす。天明の末ようやくたて
奢侈ならんとする世に名付け書画に悟りて。おのこの
渚名家なりしかども。此ひとりの前莊なりしのみ。
愛人集は家乃図とあり。ちらびらとしたる物なり。
子孫他郷に居るとかや。

半開全盛競春光。
日日帰家衣袖香。
酒館倡楼僧院絢
人情一月為花忙

又

倫敦千日惜芳菲。
悶帳苍前負友非。
醉後縱能紅照面。
時々作雪飛鬢邊。

六めぐりの年ひとと惜ぶあるに。あとを思ひて次に吉絶筆。

詩顔曰

文仲戊申罹災。家産蕩尽。尋復得疾。其病中五
秋詩曰。国接林鐘暑更獰。上蒸下湿瘧瘟并。燔
間匏具醫調護。棺後詩名天寵栄。老雀引雛窮
巷寂。新蛍灑月敗簾清。五更行雨交金吹。秋自
白川水北生。作此詩後遂不復起。終為絶筆。
先廬委蟻蒙攸獰。
鋤莫賃居貧病并。
一盎粮支百錢卜。
數篇詩敵五侯栄。
舟移夜壑令何促。
墓傍青山骨亦清。
得句猶思来質我。
毎逢風景感逾生。

上人未句自註曰。生毎得詩。或有推敲未穩者。輒
来諏之。余曰。某字可若某字。其意別像可会掌術
不置喪服于色。若不然。則欣然曰。子字尚勝也。其真率若此。文遊
傲然擲筆曰。如此不会也。

中能有義人乎。此事今尚世に来て可脳中也

○九齢字伯寿号蓋山人。不姓いか藤。近江佐々木山乃禁法の邑の人。詩と書とをよく。書は篆隷草の三体に業を結び。他邦に渡り師氏家御国ろの人母方の孫なりしが。女を家に結び。御国の醫人に多能。の笑平流の手と奇人なり。伯寿い清貧と教授し。もろもろ奇なる事。数多なるうち。所謂乃伝奇まべて。ものうち数奇なること。殺生を乃人けつて集るものを。三之首たふ第く。性魏逸風顔色。且古伝と絶結ることをよく。人と絶倒すること。咲手ふい易陽明乃学を伝しまう。京師中にてやがて名とをなるみまべ。ひ〳〵病に殺まる。とむべし

此泗湖二首

萬頃煙波涵大清。琵琶何歳作湖名。園存石鹿皇都跡。藩壮金龜侯國城。諸島争奇盤上峙。千山浸秀鏡中平。泊泊八百余川水。向此朝宗日夜聲。

西北名山數十峰。巍然粼翠画中濃。風前唳鳳笙洲竹。礒上卧龍蓉館松。天接中流涵日月。地開東海吐芙蓉。丈夫不識名區壮。宇宙何由披曠胷。

寄東適禅師

高僧丈室倚岩巉。千仞機鋒凌碧宵。講法臺前馴猛虎。参禅會上斬兒猫。寒溪明月敲氷汲。暮嶺白雲分雪樵。久抱煙霞負蓮社。思師永夜夢魂遥。

明妃曲

鐔帳秋風憶漢都。君王命妾和單于。此身空解誤明鏡。恨在蛾眉不画圖。

右二十首は何れも奇にはあらねど。生涯をよそとみて そして没したるを憐むべし。前編の者とふかく好みて。常に言はれぬ人のことゝなりとて記しおきたりけるが。あるいは花顛は在が伝を葉。其のほか又何寿をあはせていさゝか友達に後ふ

僧紗阿

紗阿。俗姓は京師の人。ちかきの上河原院ちかき子院に住す。若き時は頗放蕩なりしかども。俳諧をこのみ。しかしてもとの囲にふかく押して其名を顕はす。後俳諧を宗とす。是天明中の人也。

休絶る焼失してのちは其常に法師乃作にいへるも。大なるが中に趣ありて。右の御頼の千寒床乃中より生れりといふ。仏工の姓もとをえらびて茶店に住し。許多の金を得たれ共。ときには備二ところ残りぬ。仏像其のまゝ御あり。此御あり、然る所の首と顔を作る。是男は元来乃仏工にて度々作りなれば。名ある人の像を造れば。筆に嫌なれども時の僧此懸想の像乃はとなきを謂ふ。紗阿をも呼びて今に残る。此人をいかにも覚え。鳴き人を其数あり。其中に石山の蕃椛と供をりともありながら。名の人品はのぞ

せんかの堂を再建して円流と名づけ。又その傍に新たに
著てられ什あり。その写しを移むることを
なしてふ芭蕉庵を建てその池をうつしもるなり。
主人の好きる業多し。天明の中ごろ信濃の
乃湖乃空地に。泊庵といふものとたて。同志の人とのべ
はべくぶをとぶ料とん。ぶうたいくれなゐ清中大火乃
ほぶらとうりて信濃人にうれ。信義しられ。
けづめの無き苦しさ。癒のみしてつぶつぶいとぐち
て泊庵の院をもくり自仏場とし。此泊庵乃れい相ちる
蓮中き老著しまし。ゆりてのちに六ぬ人の係記ち。
今たを掘く。主僧の義句は会文きたぶい所れ乃書
ぶもにおきるぶ賛せん。くく病してつしふ。

主人病用其旨の先ぶきうれぬる。歌い六十者ぶるりよ

泊菴記

幻阿法師不羨榮利。不驚寵辱。所談者清玄。所詠者
俳諧。性好山水。探名區。攬勝槩。足跡幾極四海之濱。
而一寓諸諷詠焉。其居于岡崎也。並衢巷背山野。所
為聘心目而寄遊暢。乃憑神足之遍也。近更卜一宅。
乃東距數百歩。為古法勝寺跡。曰結團嶺。分白河水。
帶其門。横畧徇入之。只尺間頓隔凡境。南面華頂山。
紫翠聳出列松之際。東則南禪之樓禪林之殿。巍巍
與軒楹相當。時則作鐘磬之響。如意瓜生諸峰邐迤
而北至此庵。更開一窓受之。乃黒谷翁欝擁其前。使
四明迥以臨焉。至於雪月花樹為之裝飾。則四時變

朝暮換。不可勝状。蕞爾一團黙席。僅函丈而氣象百千盡在几席間。不亦奇乎。法師既多四方交遊。戸外之屨未免雑遝。則今之所營唯同調者而湯以下稠云。乃渴余謂曰。某老矣。不復從運東西。此其臥而遊之乎。願某所宗獻穢而欣淨是誠何心哉。師其忖度而命之。余曰。有是哉。其惟泊乎。夫泊也者寄身一葦之。上下無所定。四維無所亞。必也知其所止而後止焉。然目不得不視。耳不得不聽。彼寒山之鐘。江楓之火。亦無所待而有所待者也。經不言乎。見聞如幻翳。三界如旅泊。故見而翳之。是謂不見之見。聞而幻之。是謂不聞之聞。是界出界。方便之門其在茲與。君豈所待是舍諸。且夫華頂禪林黒谷者皆居所宗宗西之歟。此所以羮墻于旦暮乎。昔者吾正覚国師居枫之三浦。名庵曰泊。船聞芭蕉翁寓武之深川亦有泊船之堂。是猶有繫乎水与船者也。今法師之營非水而山。不船而泊。泊之時義於是遠矣哉。法師曰。善哉。請記斯言勿忘

天明丁未十一月　　溪海竺常撰

泊菴本為朋簪而設。既而又謂樹下塚間非敢所望。降此則一把之茅猶為有餘。豈可有長物乎。遂乃指之移於帰向道院。替為佛室。畧無顧惜念。於是泊菴之為泊。名實念副焉耳。大典禪師所命之為得其実矣。唐詩有之。很然一夜風吹去。只在蘆花淺水邊。法

師之視泊菴殆如斯夫。此之平泉之石。賢愚相距何如也。因記之以附前記之後

寛政癸丑孟冬　　六如杜多慈周識

古谷久語

古谷久行は伊勢國三重郡松本村乃農夫なり。四ようとつとしるうにぬして野史（軍記の俗ちとうしと讀。一わうしに紀綱し給ふ事なれど。村中の貧富ようこれとうんてとふものわれいたの事実と流して書よ。村人四日市澤より遣られ。さはかるよ人まよ役をもれ旅人の行業をも卑うるに。おいぬ僕ちれどりて浅話する士人なるべ。うくれ藩事にあることなれば。大小異体をりそで。ふ沼つて如の歴史及び万録集なども悪く時記して沼る。九ふ巣はいうのもなうるべ沼る紀

ふ。武ハふ沼し白狐の毒よ拓しうるわるも因法をり。著ふ面烟巣史又古谷竹郷ゆり。竹郷は伊勢ふ中と巡りさ。古の池沼古ちれ廣ようる。及土産のふもも考案て深をり。ちわふ古の国ふ。年。流と場ひ。豊ふ沼ふ苗民をちぐうるねば古谷の郡も君長の物ふるるりしふ。ちよ久沼の郡ぬと物ふ。古と沼ふるもりて。人の名付しわ沼ん。ふの士古まよ是と出して清奇とし。世。新く安ふ人ふ沼り。士七十の村ふ古ふの人沼りて碑と建。七十ニ年ふ沼る。ふ設をりて。ふ国。先拙ふ沼ふ猿の古国松坂ふ長氏の古ふ長内ふの村ふ沼ふ古の沼ふ沼ふ沼ふ

国立公文書館
National Archives of Japan